



Title	詫び行為における日中韓対照研究
Author(s)	崔, 信淑
Citation	大阪大学, 2004, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/44850
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

氏名	崔信淑
博士の専攻分野の名称	博士（言語文化学）
学位記番号	第 18843 号
学位授与年月日	平成 16 年 3 月 25 日
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 1 項該当 言語文化研究科言語文化学専攻
学位論文名	詫び行為における日中韓対照研究
論文審査委員	(主査) 教授 高岡 幸一 (副査) 教授 津田 葵 教授 三牧 陽子 助教授 森 祐司

論文内容の要旨

本論文は詫び行為についての日中韓対照研究である。日中韓異文化間コミュニケーションに貢献することを目的に、詫び行為について調査を行ったものである。

本論文の具体的な目的は、日中韓それぞれの社会における詫び行為の実態について、包括的な立場に立って分析することによって、それらの言語社会における詫び行為の特質を明らかにすると同時に、そのような詫び行為を規定する社会的要因について解明を試みることである。

詫びは、日常生活における非常に軽い詫びの場面から人命に関わる深刻な謝罪の場面に至るまで、その種類は多種多様で、レベルも千差万別であると思われる。本論文では、より全面的に詫び行為について把握するために、深刻度において異なるレベルの異なる 2 種類の詫び、「日常生活における比較的軽い詫び」と「人命に関わるような深刻な謝罪」について調査を行い、包括的に分析を試みた。そして両レベルの詫びについては、それぞれアンケート調査法と新聞記事の分析という異なる方法論を適用し、調査を行った。

第 1 章は序論として、主に、日中韓異文化間コミュニケーションの持つ重要性および詫びを取り上げる理由について述べた。

第 2 章においては、先行研究について概観し、本論文の位置付けを示すと同時に、先行研究の問題点を指摘し、本研究の意義について述べた。

第 3 章から第 5 章にかけては、実際のデータの分析を行った。

第 3 章では、日常生活における比較的軽い詫びの場面について、話し手側から調査を行い、分析を試みた。研究方法としては、質問紙によるアンケート調査法を採用した。質問紙には、5 種類の相手に、4 つの場面を合わせて設定し、それぞれの状況に遭遇した場合にどのように話すかを日中韓被調査者に自由回答式で記述を求めた。被調査者としては、日中韓大学生を対象とした。分析に当たっては、先行研究の問題点を克服し、より全面的に日中韓詫び行為について把握するために、因果関係や時間の経過と関係する新たな分析の枠組みを提案し、調査より得られた様々な言語表現を 3 種類のカテゴリー：「事実の言及・説明」「詫びる」「対人関係の修復・維持・発展」に分類した。また、言語表現ばかりではなく、言語表現時の心理状態および非言語行為についても調査し、合わせて分析した。分析を通して、以下のような日中韓詫び行為の違いが明らかになった。

日本人の詫び行為は、主に詫びの慣用定型表現の使用と改まった非言語行為（「頭を下げる」、「改まった表情」）

によって実現される。一方、中国人詫び行為は、主に相手との血縁関係や親疎の関係によって変化が大きい。中国人は、詫びの慣用定型表現の使用を基底に持ちながら、日本人や韓国人に比べ相手に対する働きかけを含む言語表現（「呼称」等）や非言語行為（「笑い」「身体接触」）も顕著に多く使用する。韓国人の詫び行為も主に相手との血縁関係や親疎の関係によって変化が大きい。そして、韓国人も同じく詫びの慣用定型表現の使用を基底に持ちながら、日本人に比べ相手に対する働きかけを含む言語表現（「呼称」等）や非言語行為（「笑い」「身体接触」）も多く使用している。

第4章においては、日常生活における詫び行為について迷惑の受け手側からの調査を行い、分析を試みた。具体的には、話し手調査より得られた言語表現の3カテゴリーおよび非言語行為について日中韓の受け手はどのように評価しているかについて調査を行った。研究方法としては、前章の話し手の調査において設定したアンケート項目の各状況と同一の状況に、話し手調査より得られた言語表現の3カテゴリーの組み合わせによる様々な言語表現を設定し、それぞれの言語表現について日中韓の受け手に評定してもらい、さらにそのように評定する理由を与えられた理由項目の中から選択してもらった（複数選択可）。被調査者としては、前章の話し手調査において設定した相手（迷惑の受け手）と同じ属性の人物を対象にするために、大学生、50歳前後の女性、50歳前後の大学の教官を設定した。分析の結果、以下のようなことが明らかになった。

日本人は、詫びの慣用定型表現についての評価がもっとも高いが、その理由は一言の詫び表現があるからである。また非言語行為についての評定においては、中国人や韓国人にくらべ、「頭を下げる」行為についての評定が「明るい表情（笑い）」についての評定より著しく高い。一方、中国人は特定の一つの言語表現項目について高く評価しない。そして日本人や韓国人に比べ、「呼称」など、「対人関係の修復・維持・発展」カテゴリーの言語表現項目についての評価が著しく高い。その理由は「呼称」によって親しみや尊敬を表してくれたからである。韓国人は日中に比べ、3カテゴリーについての評価の差がもっとも小さいが、中国人と同様、特定の一つの言語表現項目について高く評価しない。そして日本人にくらべ、「呼称」など、「対人関係の修復・維持・発展」カテゴリーの言語表現項目についての評価が著しく高い。このような受け手調査の結果は、前章の話し手調査で示された結果と同様の傾向を評価することが明らかになった。つまり、日本人は話し手・受け手とも、詫びの慣用定型表現の使用と頭を下げる行為等、丁寧な姿勢で詫びを表明することをもっとも重視している。一方、中国人は話し手・受け手とも、日本人や韓国人に比べ、相手に対する働きかけを含む表現および非言語行為によって誠意を示すことを重視している。韓国人も話し手・受け手とも、相手に積極的な態度を示す言語表現および非言語行為を重視しているが、その程度は中国人ほど著しくない。

続く第5章では、人命に関わるような深刻な謝罪の場面について分析を行なった。研究方法としては、新聞記事における日中韓の謝罪の取り上げ方の違いに注目した。まず、日中韓の新聞より、類似した性質・規模を持つ事件（列車脱線事故、高級管理職の収賄事件、食中毒事件）を抽出し、そのような事件が起きた際、日中韓新聞記事はそれぞれ何を重視しており、どのように報道しているかに関して、それぞれに言及した記事の分布及びその内容を中心に、量的・質的に分析を行なった。分析の際には、文字化された記事ばかりではなく、掲載された写真の対象及び人物の姿勢等も分析対象とした。そして分析に当たっては、より多面的に重大事件における謝罪行為について把握するためには、謝罪を社会的相互関係を通じて実現されるものと捉え、一連の「事件発生」「加害者側の対処」「被害者側の応答」「行政・司法・警察などによる対処」「世論の応答」の5つのカテゴリーから成立すると考え、分析を行った。分析を通して、以下のような日中韓謝罪行為の違いが明らかになった。

日本の新聞は、加害者側の謝罪表明の有無とその表明方法を最も重視している。事件が発覚すると加害者側は早速謝罪会見を行い、世間に向けて謝罪を表明する。そしてそのような謝罪の際には、どのような表現を用い、どのような姿勢であったかが写真も含め、具体的に掲載される。また、被害者側は加害者側の一言の謝罪についてこだわりを示し、謝罪が表明されれば、評価する。一方、中国の新聞においては、加害者側の積極的な対処や法的処分に重点がおかれている。謝罪表現が掲載される場合もあるが、直接被害者に向けての謝罪であり、その際には、法的処分も含めた実質的な対処への言及も必ず掲載される。記事によっては被害者側と加害者側の和解時の笑顔の写真が掲載されている場合もある。韓国の新聞においても加害者側の積極的な対処や法的処分に重点がおかれ、取り上げられている。韓国の新聞には、高級官僚による謝罪会見が見られる場合もあるが、その際には、法的処分を含めた実質的な対処への言及も必ず掲載される。

このような新聞記事調査の結果は、日常生活における詫び行為についての話し手調査（3章）および受け手調査（4章）より得られた結果とも同じ傾向を示している。つまり、3種類の調査に共通に現れた日中韓の詫び行為の特徴をまとめると以下のようになる。日本人の詫び行為は、詫びを表明することで誠意を示すことと、主に言語および非言語による表明の仕方に重点がおかされているのに対し、中国人の詫び行為は、相手に対して積極的な態度を示すことで誠意を示すことに重点がおかされている。韓国人の詫び行為も主に相手に対して積極的な態度を示すことで誠意を示すことに重点がおかされているが、中国ほど顕著ではない。

第6章結論では、以上の分析結果をまとめて論じると同時に、さらなる考察を試みた。考察においては3つの点を述べた。まず、3種類の調査において同様の傾向を示した日中韓それぞれの社会における詫び行為の特徴について、日中韓の社会的規範および日中韓言語システムの違いから考察を試みた。それから初めに述べた、本論文で提案した因果関係や時間の経過と関係する新たな分析枠組みについて検証を行い、その有効性を証明した。そして論文の最終的な結論は、日中韓とも詫びるという行為自体は重視しているものの、その表現の仕方は異なることをまとめた。

論文審査の結果の要旨

崔君の論文は詫び行為における日中韓の対照研究であり、アンケート調査や新聞記事分析を用いた社会言語学的研究である。同君のこのような研究方法論は、幾多の先行研究の緻密な検討を通して、同君が独自に導き出したものである（第2章）。ここで同君の独創性は、従来に見られるような二ヵ国語による研究ではなく、三ヵ国語にわたる対照研究であるということとともに、アンケート調査方法に以前には見られなかつたいくつかの独自の工夫を取り入れた点であると言える。

それらのうちの一つは、「詫び行為」というものを一連の時系列で捉え、過失そのものへの言及（過去）—詫びの定形表現（現在）—対人関係の修復（未来）という三つのカテゴリーを設定してアンケート実施を行ったことである。また、被調査者の多くを大学生とし、詫びの対象相手として上下・親疎関係を異にする母親—先生—年輩の女性、同年代の親友—疎友などと三ヵ国において揃えたことと、場面の設定に関しても三ヵ国で同じ状況に統一し、比較の統計処理および観察により一層の客観性を求めた点である。

これら諸点に加え、同君のアンケートにおけるさらなる工夫は、「詫び行為」というものを話し手（詫びる側）と受け手（詫びられる側）との相互作用のプロセスと考え、受け手側調査を別のアンケートによって実施し、心理面での評定や非言語行為に対する評定についても数量的に観察を行った点である。

この相補し合う二種のアンケート調査に本論文の核心部の2章が当てられている。

第3章　　日常生活における詫び行為——話し手調査

第4章　　日常生活における詫び行為——受け手調査

これら調査結果の中から、日本人は比較的に詫びの定形表現という第二カテゴリーを重んじるのに対して、中国人は過失への言及および対人関係の修復という第一・第三カテゴリーを重視し、韓国人は両者の中間的位置にあり、日に比べ、中韓は呼称といった方略を用い、また、言語的には、中に対して日韓の独月の敬語組織の利用などの特徴を観察した。

さらに今一つの同君の論文の独創性は、日常生活における詫び行為にとどまらず、「社会における謝罪行為」という一章を設け（第5章）、社会的に由々しき事件、列車事故、収賄事件、食中毒事件といった生命の危機を孕む大事件における謝罪行為を新聞記事分析を通して考察した点である。ここでは報道のあり方に関する日中韓の差異はあるものの、以前のアンケート調査を通して見た結果とのすりあわせにより興味深い観察がなされうることを跡付けた。

以上、崔君の研究は、先行研究からの多くの知見を発展させつつ随所に長年にわたり検討を重ねた独自の調査方法の工夫を凝らし、この方面的調査におけるいくつもの新機軸を加味し、独創性に富む研究方法をうち立てたものと言える。望むらくは三ヵ国間の文化的差異への言及への今一步の踏み込みが欲しかったが、この段階でも十分後學に資するものがあるものと確認した。

よって審査委員会は、本論文を本研究科博士論文（言語文化学）の学位請求論文として十分価値があるものと判定した。